

## 中国の児童教育と児童文学の発展における周作人の役割

### *The Role which Zhou Zuo Ren played in Development of Chinese Child Education and Juvenile Literature*

< 五四時期の周作人の児童教育と児童文学観 >

湯 麗 敏  
Tang Li Min

はじめ

二十世紀初期、古老の封建文化に沈湎していた中華大地で長い間にわたって醗酵しつつある文化革命の五四新文化運動が西洋文明の影響を受けた若いインテリジェントによって引き起こされた。「人的文学」の旗を高く掲げるこの運動は思考停止状態に陥った封建的な旧文化を打ち倒して新しい文学を創造することによって中国社会を改造することを試みたものであった。後に「五四運動」と言われるこの新文化運動は瞬く間に政治、思想、文化などの分野に広がり、社会的な激変をもたらした。周作人は兄の魯迅とともに運動当初からリーダー的な役割を果たし、中国の文化革命に多大な功績を残した。

1918年12月に、周作人が執筆した「人的文学」という論文が『新青年』5巻6号に発表され、社会で大きな反響を巻き起こした。文章では非人間的文学を批判し、人道主義の人類愛の文学を提唱したもので、新文化運動の指導理念として、新文化の進むべき目標を明確に打ち立てている。後に、それは「当時文学改革についての重要な宣言となった」と高く評価された。周作人がこの論文で打ち出している思想は長年にわたって心力を注いで研究した児童教育、児童文学に関する氏の論述を抜きにしては語れない。「人的文学」「平民的文学」「児童の文学」三編出揃ってこそ、初めて「人道主義思想体系が完成する」と銭理群は語っている。本稿では五四時期の周作人の児童教育、児童文化研究活動とその著書を検証しながらその児童教育・児童文学観を論じていきたい。

#### 1、五四時期の周作人の児童教育、児童文学の研究活動

五四前後の周作人の児童教育・児童文学についての研究活動は精力的なものであった。「中国では今までに児童に対する妥当な認知がなされておらず、また、文学に傾いているため、文学作品に児童向けの読み物は極まれである。」と当時の児童文学の不毛な状態に強い不満を示した周作人は民間に広く伝わっている童話、歌謡などの収集、外国の児童作品の紹介に力を注ぎ、児童文学の振興に積極的に活動した。周作人は五四以前から既に児童文学に大きな関心を示していた。1913年から1914年までの二年間に『童話略論』、『童話研究』、『古童話釈義』、『児童の研究』という四本の論文を教育部編纂会の月刊誌に発表しており、そこでは西洋の人類学、民俗学の理論に基づいた童話、児童歌の意義と価値を詳しく説明している。1920年10月26日には『児童の文学』というテーマの論文を孔徳学校で講演の形で発表した。また、自ら数多くの児童についての作品を執筆している。例えば『児童の本』、『児童故事』、『童話』、『歌謡』、『科学小説』、『玩具』、『子供の反感』などである。児童劇を編纂したり、外国の優秀な児童作品、童話の翻訳も手がける一方、地元紹興の児童歌を新たに収集、整理し、『紹興児童歌述略』を出版している。

五四時期から児童文学は世の中にすこしずつ注目されるようになり、人々も珍しく児童文学にも深い興味を示していた。周作人は間違いなく児童文学の熱心な鼓吹者の一人であった。児童文学に大きな熱意を傾けることについて、周作人は自ら回想録の中でつぎのように書いている。「1920年に私はまた一種の特殊な文学活動を始めた、それがほかでもなく児童文学である。始めたというより、むしろ復活と言ったほうが尚妥当であろう」。五四時期の周作人が提唱した『児童の文学』は、これまでの中国の封建的思想、道徳を批判し、反封建の実践的な意義を持ち、五四新文化運動時期に大いに提唱している「人的文学」の精神にも通じることから真の中国の児童文学が生まれることにつながったとも言えるだろう

## 2、「児童本位」の論理 周作人の児童教育と児童文学の新思想

児童文学というのは「児童の本能に生じる趣に満足させる」ものでなければならないという「児童本位」の主張を周作人は『児童の本』に打ち出した。

中国では長年にわたって、児童文学は児童の成長の過程に必要であるという概念が社会全体に受け入れられずにいた。当時の社会では児童文学観念が大変薄かったし、なによりもまず、社会的に児童の存在が認知されていなかったのだ。児童が成人とは違う独特な心理特徴、精神個性を持つ独立な人格を成し、社会の一部分であるという見方が乏しく、長かった中国の封建社会では児童は終始発達していない成人として見なされ、無理やりに聖經賢伝を児童に教え込み、覚えさせられていた。封建的な伝統文化の児童観により、中国歴代の児童の精神境遇と運命はさらに悲劇的なものであった。

周作人は児童の特徴が無視された伝統な封建教育思想に反論として次のような質問を提起している。

「子供の不平と女性の不平 これこそ実に人類文明の大欠陥、大汚点である」。そして「人間世界はただ一つだけあり、その中で男、女、及び子供という三つのカテゴリーに分けられる。彼らはそれぞれ一つの人種であり、男は男であり、女は女であり、子供は子供であることからして、彼らの心身上にはやはり各々の差異があるはずだ。強いて統一させることはできない・・・」、「児童は完全な一人の人間であり・・・」。要するに周作人が主張したいのは、「児童本位」にたつということであり、つまり児童文学は児童のためではなければならない、児童の趣味に合わせなければならない。また、なるべく児童の本能を満足させることが大事だということだとわたしは思う。昔、人々の児童に対する理解は歪んでいた。子どもは、子供というだけで何もわからないという先入観を持たれていた。結局子供という存在は無視され、社会的に抹殺されていた。しかし、実はそうではなく、児童はその体と心理上では大人と違いがあるが、けれども、やはり完全な一人の人間である。児童には児童の内外両面の生活があり、子供時期の生活段階は一方が成人になるまでの準備段階だということであれば、もう一方は、その段階にしかなく意義やその段階だからこそその価値を持っている。われわれは勝手に子供時期の生活が本来の生活ではなく、成人になったあとの生活が本当の生活だというふうに決め付けてはいけない。人間生活、成長の各時期、各段階に順応すべきこと 成長、成熟、老死など、どの時期どの段階も全部人間生活、成長過程に欠かせない部分であると周作人は『児童の文学』の中で論じている。中国の歴史上、児童の「完全な人間」としての地位を認め、大人と違いがある児童なりの内外両面の生活があり、児童段階の生活にもそれなりの意義と価値があるというふうに認識したのは周作人が最初だったと思う。周作人が「児童を人間として、児童を児童として」認めたことが、いわば中国の本当の「児童を発見」であった。

中国の伝統の中では、従来児童は児童にあるべき独立な地位と独立な世界を大人たちから認めてもらえずにいた。大人たちは、児童を大人たちの付属品として、あるいは親の所有物として見なしていた。其の反面、往々にして、児童や学生の才能を過大評価しすぎる傾向もあった、まるで子供たちは「三頭六臂、目が四つ」を持っていると思っている人が数多くいた。「子供に希望を託して」といっては、むやみに「詰みこめ」式の教育を続けていた。周作人もこのような教育を受けてきた一人であった。とにかく、理解の有無を問わず、毎日『中庸』、『論語』、『孟子』、『詩経』、『八股文』などを読まされて、無味乾燥な勉強ばかりさせられていたのである。

児童を心身ともに健康に育てるためには、子供時代の生活を豊富にさせ、児童に適切な「児童的文学」を提供するのがとても重要である。児童向けの「児童的文学」を読ませ、児童の自らの需要に応じて読み物を提供すれば、きっとそれなりの効果も現れてくる。子供たちが読書に対して興味をもつようになれば、知恵と情操を身に付け、想像力を豊富することもできるのである。しかし残念ながら、五四新文化運動まで、中国の児童には自分たちの文学がまだなかった。

封建社会の児童観と違って、周作人が全社会に提唱したのは「児童本位」という新しい児童観と倫理観であった。彼がとくに強調したのは児童を「理解」してあげなくてはいけない、「児童の天性に従って自由に発展させる」、大人の無理やりな干渉によって、奇妙な性格を作り上げる危険性がありうるということである。周作人は『子供の不満』という文章に次のようなことを書いていた。「たとえ子供の頬を打たなくても、日常に不当な叱り、不当な命令、さらに不当な愛撫をしたために、知らないうちに子供たちの優しい感情がどれだけ傷付いたのか、どれだけ美しい夢が壊されたのか、また、将来の性格形成にどれだけの影響をもたらしたのかが、まったく考慮されていなかった」。したがって、ご飯をまだ食べることができない赤ちゃんには流入食を食べさせ、まだ歩けない赤ちゃんは抱き上げるのと同じように、児童にはその個人に対応した独自の生活様式を認めなければならない、そして、大人との生活とは違いがあるのを客観的に理解しなければならない。その上で児童の性格、主張と需要を尊重すべきなのである。児童たちはまったく物心がないわけではなく、草木が自分と同じように思考をもち、犬猫が話すことができると当たり前のように信じている。しかし、大人の我々は、天真爛漫な子供に向かってこれらを頭ごなしに否定するなら、きっと子供たちにとっては、マイナス面が生じるに違いない。なぜならば、子供から大人までの各段階は自然的に移り変わって行くものであり、一つでも通り抜けることができるものはない。大人の叱りにより子供の心にある程度の傷をつけるかもしれないし、子供の想像力を抑えられるかもしれないので、プラス面よりマイナス面が多くなるわけだ。

こうした観点からみると、児童に対する教育は児童の成長と生活の実情に応じて、行わなければならない。児童の生活を豊かにし、満足させることに努力を尽くすべきなのである。たとえば、児童なりの想像力がたとえでたらめな思考であっても、やはり子供の興味と趣味に応じ、満足させるべきであり、抑え付けてはいけない、児童の性格、興味に合わない教訓、主義などを児童に無理に押し付けてはいけないのだ。

一方、周作人の考えでは、児童の生活は常に変化していく、また成長途中であることを十分に理解し、児童の発展に順応し、細心に見守ってあげなければならない。児童が持っている興味と趣味を満足させると同時に、児童の趣味を育て上げ、指導するべきであり、そして、今まで持っていなかった趣味や興味を喚起する。さらに、停滞させない、正規の軌道から離脱させないようにしなければならない。

周作人の児童観を言うと、「児童本位」のほかに、もう一つ側面がある。彼は「人間の自然発展」ということも強調している。児童の本性に順応するということは、放任や好き勝手にさせることなく、教育と指導も必要であり、これらの教育と指導は、かならず児童発展の自然法則に慎重に順応しなければならないこと、適切な「満足」と適切な「指導」の目的は児童の発展が正規の軌道から離脱しないようにすることと彼は記している。

### 3、教育観念の変化によって、児童文学の発展を促した

中国は昔から児童大国であり、したがって児童教育の大国でもあった。しかし児童文学の大国ではない。その理由は次の四点を指摘できると思う。

一つ目は、児童文学が児童の成長過程に必要なものであるという概念が社会的に広範な認識と重視を得られず、社会全体の児童文学観念がまだ樹立されていなかったこと。二つ目は、中国児童文学は自分たちの民族独特の個性に基づいた理論体制をもたず、その故個性がある児童文学観を持ってなかったこと。三つ目は、児童文学の学科建設が遅れ、時代の特徴を現すような完整された児童文学の学科体系が形成されておらず、学科建設

の理論研究も不十分で、児童文学を批評できる学術環境がまだ整えていなかったこと。四つ目は、児童文学を発展させる条件がまだ揃えていなかったこと。そのために、中国の児童文学がずっと独立した文化品位に欠け、長い間、自己閉鎖の状態に置かれていたということである。社会では現実の変革によって児童の心理状態、児童文学の価値観も影響されることをあまり念入りに見なかったから、その時期の児童文学は結局、通俗浅顕なものにとどまり、作品がより高いレベルに発展することができなかった。

辛亥時期から五四時期までは、まさに中国教育界にとっても革命の時期であった。絶えず新しい観念が生まれ、広げられ、さらに発展することによって、新しい児童観が教育のルートを通じてより広げられて、さらなる児童文学の発展を促した。現象としては、まず児童の個性の発展を重視することが強調され始めた。当時、「保守的な古いものを守るより自然に従い、一律を求めるより、個性を發展させたほうがよい」という風潮が世の中に現れた。次に美育観念の確立。教育観念の変化により、教育を携わっている人々には伝統教育がますます保守的で、重苦しい、後進的と感じられるようになった。伝統教育の呪縛から放たれ、可能な限り新しい教育空間を求める声がますます強くなった。そうした動きに伴って、児童の課外の読書物が自然に人々の関心を集める話題になった。その動きに助長されるように、児童文学が児童教育の中での価値も高まっていて、人々に認知されるようになっていた。

この時期に、中国の現代文学が提唱したのは民主、科学、自由、個性開放といった主題であった、それと同じく中国の現代児童文学の文壇では主に、いかに封建の束縛から子供を解放するか、児童の文学は児童になにを与えるのかを討議した。この時期に外国の作品と古代作品の書き直すことは児童文学の重要な一部分になった。児童文学はずっとある程度外国児童文学観の影響を受けており、とりわけ、二十世紀の前期には周作人によって伝えられた日本児童文学観、文学理論の影響が強かった。1921年周作人と兄の魯迅は二人で『現代日本小説集』を翻訳した。中には志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』という短編も収められていた。周作人は其の訳文を発表した一ヶ月後の1921年9月22日『晨报・副刊』に『感慨』という文を出し、次のように書いていた。

「私には教育の哲学は分からないが、今の児童教育には欠陥がかなり多いと思う。私の知っている限りの家庭と学校の児童教育の両方面から見れば、学校の先生たちが自分の教育相手 児童の性質を理解するまでに至らないのは確からしい。『清兵衛と瓢箪』はもっとも軽妙な筆致でこの悲劇の中のもっとも平静な一幕を描き出した。しかし、なにしろ悲劇が悲劇だから、それが私の感慨を呼び起こしたわけである。」

(中略)

「まさか理解できないことはあるまい。私は突然中国でよく見慣れた「天地君親師」の五大文字が刻んである木の札を思い出してはじめて急に解けて大いに悟った。つまり、この五種類の人の地位はそれぞれ違うのに、その権威は同じである。家庭や学校の教育もその専制政治の縮図の中にあるのに、専制と理解は両立できるものか」と。

世の中で子供の一個人としての地位は往々にして認められておらず、其の個性の養成も大抵過剰な干渉をされて、自由に成長することはほとんどできなかった。このことがほんとうにきわめて悲しい一幕であったが、しかし、この悲劇の主役をしているのは学校の先生と家長、いわゆる子供の教育者と保護者であった。学校の先生や家長は、自分の演じている劇の悲しさを感じていない、むしろ感知することができないでいた。そこでこんな悲劇が年々日々、私たちの周りに繰り返して静かに起こっていたが、残念ながら、人々の関心を全然呼べなかったのだ。特に封建専制政治が主導を握った中国社会では天地君親師の権威は家庭、学校に浸透したことによって子供の人權はまったく無視され、子供は往々に大人から、無理矢理に干渉されて、自分の天性を自由に発展できない状態であった。周作人はたくさんの日本の児童文学作品、とくに、志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』を読んで、訳して、中国の現実に存在しているこんな歪曲された社会状態に向かって「感慨」した、いや「憤慨」したとも言える。このような状態が続いてはいけなく、完全に変えなければいけないと周作人は考えたのだろう。「そもそも大抵の児童教育はもともとそれほど難しいことではない。ただ植物を育てるように、ま

ず植物の共通の性質を知り、それからそれぞれの特性に合う方法で栽培すれば、植物は自然にどんどん成長するはずだ」ということを周作人は人々に伝えたかったのではないだろうか。

周作人の児童に関する教育と文学の理論に導かれて、社会では喜ばれる文学 童話、神話、故事、などが大いに提唱され、児童文学は当時の教育界、文学界、出版界で、もっともモダンで新生な物事として宣伝されるものになった。

学校の先生が児童文学を教え、児童たちが児童文学を読み、児童文学を研究し、児童文学を講演し、児童文学を創作する熱意が一時期非常に旺盛になった。社会歴史発展の必然物として児童文学がついに五四時期に生まれたのだ。

児童文学活動初期の20年間には子供向けの新聞雑誌類がたくさん出るようになった。

主に『子供月報』(1875年)『蒙学報』(1897年)『寓言報』(1901年)『童子世界』(1903年)『少年報』(1907年)『蒙学画報』(1908年)『少年報』(1908年)『児童教育画』(1909年)『童話刊』(1909年)『少年雑誌』(1911年)『中華童子界』(1919年)『児童画報』(1914年)などがあった。

五四児童文学活動期間では主な活動家という魯迅と周作人のほかには、胡適、郭沫若などがいた。その時期の子供向けの主な児童文学と新聞雑誌は次のようなものがあった。

『児童世界』(1921年)『小説月報・児童文学』(1921年)『小朋友』(1922年)『児童文学』(1923年)『晨报副刊・児童世界』(1923年)

重要な作品と見なされたのは『稻草人』(童話)『小読者へ』(散文)『葡萄仙子』(歌舞劇)

また、以下の理論著作があった、周作人の『児童的文学』(1920年)『児童についての本』(1923年)、胡適の『国語運動と文学』(1921年)、嚴既澄の『児童文学汎論』(1921年)、郭沫若の『児童文学の管見』(1922年)魏寿鏞、周候予の『児童文学概論』(1924)、凌氷の『児童学概論』(1924年)など。

そのほかに、外国の作品もたくさん中国に紹介された。日本の生田春月の『新しき詩の作り方』の詩も周作人による訳されたが、其の中に「子供の歌」もあった。例えば：

「つばめ、つばめ、我が家のつばめ、  
迷子になったの？  
向うのあかい瓦の屋根に  
早くいってとまれ！  
つばめ、つばめ、  
かわいいわたしの妹よ。」

このような子供らしい素直さと、のんびりした調子で、子供の心持ちになった歌は周作人により、中国の読者に広げられた。

終わり

二十世紀に入ってから、いかに児童教育をするか、いかに児童文学の作品を作るかは、社会の普遍的な注目を浴びる事業として重視され、人々はさまざまな角度から児童文学に関心を払い、大人たちは児童の心と知恵を啓発することに苦心するようになり、教育者たちは、児童の道德素行を育てることに文学の役割を重視するようになった。児童文学者たちは、美学の角度から、その芸術特徴を検討し、政治、社会活動家は子供たちの心身ともの健康的な成長に念入りの注意を払い、図書出版、本屋さんもそれぞれの立場、角度から児童の教育と児童の文学に関心を払うようになった。子どもたちが未来の世界を担う者であり、文学は彼らの成長に極めて大きな役割をしているのを絶対に軽視してはいけないことはもう人々の共通の認識となっていた。いかに文学の力で子供たちが健康に成長するのを導くか、強いて言えば、これは、国家と民族の未来の運命に関わることだというふうに考えても良い。

20世紀のはじめ、周作人は児童の歌、童話、児童文学などを研究し、論文もたくさん発表した。西洋の現代科学 文化人類学理論を使って、児童文学を研究するのは、たぶん中国では最初の試みであり、また大量の児童に関する教育学の論文と作品を書いたこと、外国の優れた作品を翻訳したことは中国の児童教育の面できわめて輝かしい功績を残したと言える。その上で、中国の現代児童学の健全な発展にしっかりとした基礎を作り上げた。

参考文献

- 周作人 自己的園地・雨天的書 人民文学出版社  
周作人 知堂書話上、下 岳麓書社  
周作人 風雨談 岳麓書社  
周作人 中国新文学的源流 文閣書店  
周作人 談虎集 香港实用書局  
于耀明 周作人と日本近代文学 翰林書房  
李景彬 周作人評析 陝西人民出版社  
錢理群 周作人論 上海人民出版社  
雷起立 苦境故事・周作人伝 上海文芸出版社  
陳子善 閑話周作人 浙江文芸出版社